

1 研究主題

自己指導能力の育成を目指して
～ 生徒指導の3機能を生かした実践から ～

2 はじめに

令和4年12月に生徒指導提要が12年ぶりに改訂された。その背景には、(例)学校や生徒指導を取り巻く環境が大きく変化するとともに、生徒指導上の課題がより一層深刻化している状況がある。また、スマートフォンやゲームなどの通信機器を介してしか人と関われない子ども、自分の宿題よりも家事や子守りの手伝いを優先させられる子ども、幼少期に親から十分な愛を注がれずに育った子どもなど、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化をしている。そのため、特定の友人としか付き合えない、些細な事ですぐにトラブルになる、我慢することが苦手ですぐ相手に手を出してしまうなど、集団で生活していく上で、問題を引き起こす児童生徒はどの学校・学級にも見られる。こういった状況から、良好な人間関係を築き、様々な場面で適切に判断し、行動することができる自己指導能力の育成はとても重要であると考えます。

3 研究経過

自己指導能力の育成を図るために、①自己存在感を感受させる活動、②共感的な人間関係を育成させる活動、③自己決定の場を提供する活動の3つの視点から研究に取り組んだ。

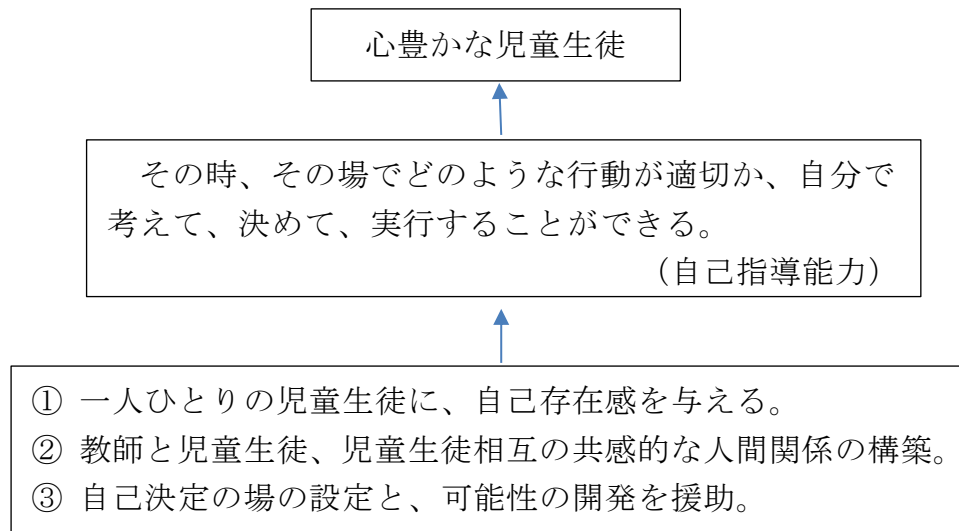
研究方法は、各学校の学年・学級で取り組んでいる独自の教育活動(あいさつ運動やスマホ教室など)をレポート形式にまとめて、報告をしてもらった。そして、その活動について各小中学校の生徒指導担当者が話し合い、意見交流をする形で研究を進めた。意見交換をする中で、単なる取組に対しての評価で終わるのではなく、自己指導能力をさらに高めるためには、今後どのように改善していくとさらに効果的になるか等についても話し合った。

4 研究の概要

(1) 機能としての生徒指導

様々な教育活動を通して生徒指導を機能させる場合、児童生徒に「自己存在感」を与え、自分の行動の仕方を「自己決定」することのできる場を与えることが重要であると考えます。そして、これらを「共感的人間関係」を基盤にして作用させているとき、自己指導能力が育成され、心豊かな児童生徒が育まれると考えられる。

(2) 研究仮説のモデル



(3) 研究内容

ア 一人ひとりの児童生徒に自己存在感を与える

複雑な家庭環境や人間関係の中で児童生徒は心の拠り所を求めている。教師の働きかけはもちろん、他学年との関わりの中で役割を与え、その働きを認めることで、児童生徒は自己存在感を感じることができる。

イ 教師と児童生徒、児童生徒相互の共感的な人間関係の構築

小学校では大縄大会やなかよしタイム、中学校では体育祭や文化祭などの学校行事を通して、児童生徒同士の人間関係つくられる。またその教師とも良好な人間関係をつくる機会にもなる。

ウ 自己決定の場の設定と、可能性の開発を援助

学校行事だけでなく、日々の学級活動において、児童生徒に適切な役割を与える。自分たちで考え、行動させて適切な評価をする。自己決定、成功体験を繰り返し経験させることにより、責任をもって行動することができるようになる。

5 今後の課題

それぞれの学年や学級の取組について、生徒指導の視点から捉えることで、児童生徒の心や行動に変化が見られ、学校生活に対して前向きな姿勢を見せるようになった児童生徒もいた。取組だけを行うのではなく、どの視点を重視して活動を行っていくのか、教師が児童生徒にどのような声かけやアプローチをしなければならないのかをしっかりと考えていく必要がある。また、意見を交わすことで、上記の①②③が生徒指導を機能させる上で重要な役割を担っていることが分かった。

今後は、継続的に児童生徒の変容を見ていく必要がある。また、4つ目の視点「安全・安心な風土を醸成させる活動」にも目を向け、研究していく必要がある。現在取り組んでいる活動を継続しつつ、改善を加え、より一層児童生徒が自己指導能力を高めていくことができるよう、研究に努めていきたい。